
ラビvsキルア

真衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラビVSキラア

【Nコード】

N1805A

【作者名】

真衣

【あらすじ】

ミックス小説ですWでも、結局はラビ系です。

事件は始まりやがて終る…・

「ねえ、ラビ。」

「ん？何さあ？」

二人は公園を歩いていた。多分任務ちゅうだろう。

そこに見覚えのある顔が波音の横を遮った

「キル…？キルア？！」

どうやら少年の名はキルアと言うらしい

「おお！波音じゃん♪お久さ」

「誰？このちっこいの。」

ラビが横から口を出しやがった。（口調が…・・・b y真衣

「んとね、キルアっていつて私の友達だよv」

「友達か…そうだよね、ただの友達だよね」

ラビの言葉が気に触ったのかキルアが眉をピクツと動かした。

「何あんた？こんな厚いのにマフラー巻いてさ。変人なわけ？」

ああ…始まってしまった。

ラビはただでさえマフラーの事をいつも気にしていたのに…

「何?! 巻いてちゃいけない法律がいつ出来たわけさあ―?!?!」
「そんなこといつてねえよ。俺は只、『何でこんなに厚いの巻いてるのって聞いただけ』。」

『ばかばかしい。早く帰りたいなあ。』波音は心のそこからそう思った。

「というか、波音と俺は今仕事中なの! 邪魔しないでさあ―v」
そういうとラビは波音に抱きついた。

「ラッラビ;; 離して;;」

ぶち。

キルアの理性が切れた。

「なあ・・・そのマフラー。」

名前が知らないのか変なあだ名で呼び始めた。

「マツマフラー?! そんな名前の人居ないさあ!」

「名前しらねえもん! 超能力しゃじゃないんだから自己紹介しないと分かるわけ無いだろ!」

ああ! そっか。とラビは手を打った。

「俺の名前はラビさあ V」

「うん」

キルアが笑った……

最悪のシナリオだ……

ぶちっ

今度はラビの理性が切れた。

「ぷっ！ あはははは！ 何その名前！ 馬鹿っぽい。」

「大人じゃないと子の品の良さは分からないさあ！」
二人は低レベル名口喧嘩をしていると波音が叫んだ

『ラビ！避けて！』

「え？」

最低最悪だ……AKUMAだ……しかもLV3……

ダメだ……間に合わない。しょうがない！

『イノセンス発動!!!!!!!!!!!!!!』

波音がイノセンスを発動させた。

『風化 演舞陣!』 所謂うとAKUMAの周りに風が集中し始めた

「波音! 助かったさ!」

「そう思うんだったら早く助太刀しろ! 馬鹿うさぎ!」

「イノセンス第二開放…判! 劫火灰燼!」

ラビの必殺技! でた!

と思った瞬間ラビの技はクリティカルヒット!

キラーン

何所かでそんな効果音が鳴った。

「安心せい火加減はしといたさ。」

キルアはただ、呆然と見てた。

「マツマフラーの奴すげえ・・・」

キルアは無償に悔しくなった。

「ラビ!!」

「ん? 何さ? あ! ご褒美のキス?」

「何言ってるの! あのAKUMAにイノセンス場所聞いてない!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「「「あー!!」」」

「こんの馬鹿うさぎ!」

暴言を吐きまくった。意外にスツキリした。

と・・・そこへ空から何か：イノセンスが降ってきた。

イノセンスは私の頭にヒット!

キルアが駆け寄ってきてイノセンスを拾った。

するとイノセンスは突然光出した・・・

ま・・・まさか・・・キルアが

「「適合者?!」」

私とラビは声をそろえていった。

ってことはあ・・・

「キルアも教団に連れていかないとねV」

ラビはすんげえ、嫌そうな顔をした。

「きゃ・・・脚下さ!絶対適合者じゃないさ!」

「さつき言ったじゃん『適合者』って。」

「あ・・・あれは間違いさ!」

とにかく判明しているのは ラビに構っていたら切りがない
と思った。

「キルアくV一緒に来てねV」

「おう!」

「俺の波音に着やすく喋りか来るんじゃないさあ!」

余談

「適合・・・者・・・だ・・・間違い・・・ない・・・」
ヘブラスかが言った。

それからキルアも教団内のエクソシストになった・・・
それから二人の争いが続いたのは言うまでも無い。

E
N
D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1805a/>

ラビvsキルア

2010年12月19日00時37分発行